

丈人力のススメ

く生々と「人生九〇年」を生きる

堀内正範 著 元『知恵蔵』編集長

こんなこと

その一 「熟成への道」をたどりながら

- 一 「老人力」から「丈人力」へ
- 二 長寿を愛しむ三つの秘策

その二 「非を飾る」世相をみる

- 一 「好事門を出ず、悪事千里を行く」時代
- 二 三人に三様の高齢期の課題

その三 揺れる家族

- 一 「MY・・」がないマイホーム 3
- 二 「家庭内リストラ」のコア（核）用品 13
- 三 暮らしの知恵を次世代に伝える 21

その四 優れた国産品・地産品が再登場

- 一 「MADE IN JAPAN」の時代
- 二 途上国産の百貨商品に囲まれて
- 三 優れた国産品・地産品への契機
- 四 「新・日本型マネジメント」に活路
- 五 企業は定年延長で多重構造にシフト

その五 暮らしの和風回帰

- 一 「四季と特性」が息づく地域に暮らす
- 二 和風の暮らしを共作共演

その六 高齢期二五年の居場所

- 一 「エイジング・イン・プレイス」を定める
- 二 世代交流のさまざまな現場
- 三 地域づくりの仲間づくり
- 四 まちの中心街を「モノと暮らしの情報源」に

その七 一高齢者としての八面玲瓏

- 一 一住民・一市民・一国民として
- 二 一国際人として

付 三世代年表 生年別の人口（男・女）、流行語、流行歌

その三 揺れる家族

一 「MY…」がないマイホーム

「マイホームパパとママ」Fさんの憂鬱

*アノヒトとかヒカラビてる人といわれて

「マイホーム」

耳にすると心安まる、なんともいえず響きのいいことばである。これほどまでに安心感を内包しえたカタカナ日本語を、他に探すのはむずかしい。

いま高齢者となっている人びとが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語なのである。だからその細部の意味合いは個人によって異なる。

安眠できる場所。ひよわなもの、よき（良き、好き、善き）ものを守る城として、「マイホーム」はそれまでの「わが家」や「家庭」などとともに、それに劣らない温もりを日本語として持つに至っている。そのぶんだけ「ホームレス」ということばがわびしさを伝える。

戦後っ子だったパパとママは「マイホーム主義」と先輩にからかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らし、必死に働いて、ふたりの子どもを育ててきたのだった。

夫婦と子どもふたりの家庭が都市型の住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」

ともなった。マイホームの誕生である。

その後、職場までは遠くなっても、「マイホーム・パパとママ」は、二段ベッドの子どもたちにそれぞれ一部屋をと考えて、団地からさらに職場まで遠い郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越した。そういうマイホーム体験をもつ人びとは少なくないだろう。それが「しあわせ家族」だったのである。

まだ若かったパパとママは、人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得し、いまそのころ見据えていた地点近くに高齢者として立っている。長くもあり短くもあつた来し方を顧み、マイホームの当主としての存在感を確かめるために、じっくりわが家の中を見直してみる。

家族の希望をかなえることを優先して、そのぶんだけ自分の希望を抑えてきた。その結果、不相应な応接セットや家具といった家族共用品はあっても、みずから求めた専用品というのは少ない。「モノと場」に表わされる当主の存在感が意外に希薄なのに気づく。

そこでここでは、ご夫婦と子どもふたりの核家族、「団塊世代」であるFさんのマイホームを覗いてみることにしたい。

娘と息子が「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。サッカーのイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らすFさん。

上の娘は短大を出てからフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。

下の息子はごく普通の大学をごく普通に卒業して、親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるのだが、就職試験を受けて採用されて勤めはじめた有名輸送会社だったのに、短期でやめてしまって家にいる。大学を出たのだからと自主性にまかせているが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをして過ごしている。起業の話をしたり、時折り出かけて「職さがし」をしているとはいうものの、「ニート化」(NEET。就業希望を有しない若年無業者)への気配もただよう。

娘と息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつている。時には父親に対して「アノヒト」、母親に面とむかって「キミ、元気かね？」と呼ぶなど、軽くあしらわれていると感じることがたびたびある。

「この家はわたしが名義人なのだ」

などというのも愚かしい。壁面に娘が貼った「のりか」(藤原紀香)のポスターほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁にそれほど存在感があるわけではない。

「ヒッペガシ娘」vs「ツカエナイ親父」

*「ツカエナイ親父」とはなんだ

「塩づけの資産？ そんなものどこにもありはしないし、わが家では子どもたち、とくに娘に

よって強奪に近い形で浅漬けする前にヒツペガシ（資産移譲？）が行われているのですよ」

Fさんは諦め顔をつくってグチっぽく早口でいう。

高齢者の平均の貯蓄額が二二五〇万円あって、暮らし向きに心配のない人が半数を超える、という調査結果を、同居の娘と息子は真に受けている。うちの貯蓄はお前たちが勝手に居そうろうをしているために平均に遠く及ばないとはいづらい。

身の周りで額が平均に達していると推測されるのは、現役時代から家にFAXを置かず、酒も吞まず、生命保険の話をよくしていたBくらいではないか。

二人の子ども、とくに年頃の娘をもつ家庭はたいへんだ。女性がこれからこの国の経済、社会の担い手になるといって、無責任にもてはやすものだから、図に乗っている。どれほどの若い女性が自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうか。

ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそとデイオールのパティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、際限なしの「女性化」にFさんは懸念をもっている。親の育て方がどうのこうののではなく、時代の風潮なのだから、親がとやかくいっても仕方がない。

「時代の花」として娘たちを擁護し、女性の活力に無条件に期待する立場からは、両親や祖母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もある。何より娘たちは家庭内ヒツペガシを当然のことと考えている。二二五〇枚の福沢諭吉幣がどこの家庭にもあると

思っている。

女性の活用にはあたり一面で火がついたよう。

ダボス会議の「男女格差報告」(二〇一三年の発表)では、外国にくらべた女性活用で日本が一〇〇位以下という低さが報告されてきたが今更のように話題になる。経団連も、同友会も、そろって女性の登用を「ダイバーシティ(多様性)の推進」としてすすめる。

さらに女性に活躍の場をという「女性の活躍促進による経済活性化」行動計画を働く「なでしこ」大戦略」が、二〇一二年六月に、野田内閣の関係閣僚会議で決定された。小宮山(洋子)大臣も大いに乗り気の事業であった。

そして安倍(晋三)総理も国連総会の演説でまで女性重視を打ち出している。「タカラヅカー〇〇年」であいさつに訪れたメンバーにははじけるばかりのもてなしぶり。

女に生まれてよかった。笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面はNHK、民放を問わず、はしやぎまわる女性たちで占められている。広告にはもとから若い女性が露出していたが、いまやはちきれんばかり。三〇代のおじさん、おばさんはすでに脇役だし、ましてやおじいさん、おばあさんなどは認知症の番組以外には出番すらない。

娘の要請に人並みに応じられないと、「ツカエナイ親父！」としてあしらわれる。お前こそ「ツカエナイ娘！」といい返せないところがつらい。Fさんばかりか、うかうかしていると心優し

い高齢者が居場所もない、おカネもないになりかねない。これが先行して世界に誇るべき「日本高齢社会」の実情なのである。さすがに内閣府の資料にも成功例に向かっていているとは書けなくなっている。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに渋く輝いているはずだった高齢者が、居場所すらなくなるとは何たる仕打ち！

職場では売れ筋ヤング製品の製造現場からはずされ、IT音痴と揶揄され、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見た「ホームレス」用のブルーテント群や炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後の「ふりだし」へと急速に崩れ落ちて行くように思えてくる。

高齢者にとっては「逆風行舟」である。いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」の気配

*居場所はファミレス・図書館・パチンコ屋

わが家にいて、「ホームレス」とさほど遠くないわびしきを感じている戦後ツ子パパが増えている。パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでなかったことがはっきりとし出したのである。

一台しかない居間のテレビのチャンネル権はない。というより見るに値する番組がない。クルマも一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どもたちのようにあちこち行くスーパーやコンビニもない。といって車検・整備・ガソリン・JAFまですべて親持ちである。食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。マヨネーズづくし。自分では作りようがないから仕方がない。回転ズシに連れていく。出てくる好物はタママヨ。

つまり「ステージ」がない状態が刻一刻深まりつつある。

友人に聞けば、濃淡あるもののだれもが同様で、出勤がなくなって、家で共有していた場所も居場所でなくなつて、「ホームレス」になる気配。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、公共図書館かパチンコ屋の休憩室か二四時間営業のファミレスくらい。原因は自分にもあるが、社会の意識やしくみにも大いにある。そこまでは分かっているけれども、その先どうしたらいいのか解らない。このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」など招き寄せようもない。

「MY・」がないマイホーム

*わがブランド品はオメガの時計だけ

Fさんの話に戻ろう。

Fさんは改めてじっくりわが家の中を見直して見た。

本だなの本が動いていない。耐久品の家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の製品だ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は、百貨やスーパーものが多くなった。シャツはユニクロかアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物のなかには先進国ブランド品もあって、ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON バッグ）やプラダ（PRADA バッグ）やディオール（Dior 服装品）やシャネル（CHANEL 化粧品）などといったものはFさんにもわかる。スーパー品とのアンバランスさに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

Fさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA 終わりの意）の腕時計だけ。家族のために優先してきたことでの専用品の品薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないか。

家庭内に自立した存在としての拠点がない。「自立」は意識だけの問題ではない。モノによって表現されるものもある。「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であって、最も優遇されている仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていないのである。

「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状の処遇に不満なのである。

両親に対する不満との葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された

「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の「潜在的ワル度」をFさんはつかめていない。それよりも、原因が自分にあつたと気づくことになったのがつらい。

Fさんが会社からの帰りの車中で楽しんだタブロイド版夕刊紙の「悪を暴く記事」によって、家庭内にもちこまれた「荒廃菌」が、抗体のない子どもたちに取り込まれて久しい。いまやそれぞれの胸中をうようよ泳いでいるのだ。そこから発せられる配慮のないナマのことばには、たしかに家族にはなかつた他者の悪意が混じる。

当主として当然のこととしてきた家族への配慮が、「人生の第三ステージ」にはいった自分を支える磁場の不在となっている。そのことに、Fさんは危機感を覚える。

マイホームに「MY・・」がない。では「新宿ホームレス」とどこが違うというのか。高年齢の「自立」のためには、同居人に存在感をきちつと示すモノの拠点が家庭内に必要なのだ。

そのための専用スペースとモノの確保。

・・といったところで、夫婦と子ども二人で最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋なんていう余裕はない。子どもたちが親ばなれをせざるにいてから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋であるとは共用のスペース。部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、獲得に失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点どころか「家庭内ホームレス」の確認になってしまう。

となると共用スペースであるリビング・ルームの一面。たとえ不在であっても当主の存在感

「不在の在」をきちっと示せるコア（核）をつくることにある。

「家庭内リストラ（高齢化）」は、させるのではなく、自らするものである。当主の存在感を示せる「わたしのもの、MY・・」。

傍らにあつてわが高齢期人生を輝かせてくれる「わたしのもの、MY・・」とは何か。

それを意識して身のまわりに配置する。たしかに、いまリビング・ルームを見渡しても、何もかもがそうでありそうでない。おおかたは共用品なのだ。本棚の本にしても、わたしのものといえるものはあるが、それもばらばらにある。これまでそういう意図がなかったのだから、「わたしのもの」といつて際立つものなどないのが当たり前。

六〇をすぎて八五歳までの暮らしのステージ構築のための「家庭内高齢化リストラ」。

後でると述べるが、これまでに蓄えてきた知識や経験や技術を、さらに深化・発展させることにプラスになる「わたしのもの」を、いつでも利用できる状態にして置いておく。保持している知識や経験や技術は、家庭内でも地域社会の活動に参加するにしても、だいたい「個人資産」なのだから。

「引退余生型」の人も気づいてここまではやるのだが、「現役長生型」の「家庭内高齢化リストラ」とは似て非なるものである。それはこの後ですぐに証明される。

身近にあつて「わたしのもの」という役割を担えればいいのだから、ブランド品である必要はない。日ごろから愛用しており、それなりの存在感があればいい。

これと決めた「わたしのもの」を基点にして「家庭内リストラ」をすすめる。長い高齢期の住環境を半歩ずつ、さりげなくそれとなく整えようというのである。

まずはひと昔前までNO・1の愛用品であり必需品であった机と文具類。いまやインターネットとEメールの時代だから、卓上パソコンと周辺機器に主役を奪われて久しく、脇役に耐えてきた。これからの「人生第三ステージ」の活動を支える「高齢化用品」の基点として意識して、馴染んだ机は新たな「高齢者意識の据え置き場所」として確保して活かすことになる。

二 「家庭内リストラ」のコア(核)用品

当主であるFさんの「親父の座」

*「MY・チェア」には即座の効用がある

「団塊シニア」のひとり、ふつうのサラリーマン生活を終えたFさんには、「わたしのもの」として身を飾れるようなものは何もない。人気TV番組「なんでも鑑定団」(テレビ東京)に出せるような親ゆずりの遺産がある人がうらやましい。

Fさんはリビング・ルームを見直した末に、小さな庭と室内の双方が見渡せる窓際の一角に、高齢者用特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えることにした。

会社でも窓際だったし家でも窓際でいいと、居心地を合わせることに納得して。それにふさわしい椅子を仕入れることにした。ここは思いきって出費（浪費）することにしよう。あとは文字盤が気に入っている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。「家庭内高齢化リストラ」の第一歩である。

Fさんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢化時代を表現する「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。重量感より意匠センスより何よりも座り心地を優先する。いふなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」「親父の座」である。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「MY・チェア」として大切に扱うことにしよう。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」というのは、マイホームを建てたときから気にしていた建築家の提言で、まことにその通りと思っても、家族思いの当主としてはそこまで自己主張をしなかった。いまその実現の時なのだ。

老い先長い高齢期を通じて使い込むことよって座り心地を熟成させてゆく「MY・チェア」。これなら次世代の高齢者への遺産にもなる。それより何より重要なことは、長命期に寝たきり

にならないこと。わが国の百寿期の女性に寝たきりが多いのは、和式の立ち居振る舞いのあと、畳の上で正座をするか、寝るからだからだという。日ごろ、椅子に座って過ごすことが少ないので、寝たきりになるのが早いのだという。男性だって同じこと。

Fさんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらして、見るからによく、座り心地もよく値もよいという。一日の長どころか世紀の差を感じるという。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製のリクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、座り心地もよく、値段も思いのほかの幅があるという。

「MY・チェア」は長い高齢期を安らいで過ごすための拠点なのだから、これといったイスと出会ったら思い切って投資（浪費）をするとFさんは決めている。後半生が始まる還暦や古希祝いに購入するのもいい。定年を迎えて、ごくろうさまと退職金からねぎらうのもいい。

一日のしごとを終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえる。ややあって「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのだ。

どっしりと座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を交互に委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

わが家の「モノ同士のモノ語り」

* 専用品をつないだ暮らしの動線

みなさんが「わたしのもの」といえるコア（核）用品を据えることで、静かに家庭内の「高齢化リストラ」が動き出す。そのうちに同居人が「パパのもの」として気づくだろう。

候補はいろいろある。

デジタル化で実用性を失ったが、シャッター音と手触りの感触によって来し方のなつかしい記憶がよみがえる高級一眼カメラ。部品は揃えてあるがソフトが揃わないオーディオといった愛用機器。楽器の類。碁・将棋盤や釣り具セット。手仕事に感じ入っている碗、皿、硯。明かり、時計、置物などのアンティーク。それにあちらこちらに散在していたのを、全員集合！をかけてあつめた一二〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だ。

日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・・・。

どれもお気に入り「わたしのもの」であり「高齢化コア（核）用品」の候補だが、その中から五く七点を選び出して、机と椅子のまわりや活動の基点になるところに配置する。自分が

動いて見える範囲に置き場所を決めて、ひとつひとつ配置すればいいことだ。

家庭内に「高齢期のステージ」が静かに着実に形成される。

地球儀なんか意想外におもしろい。

「海洋大国」であることの壮大な世紀の夢が見えてくる。極東の隅っこにある島国「小日本」に代わって、太平洋リング（大洋弧）の一角にあつて、海岸線では世界第六位（二九、七五—km）、排他的経済水域・領海・領土では世界第九位（四、八五七、一九三km²）をもつ「海洋大国」であることを思えば、壮大な世紀の夢が見えてくる。経済や文化の上で太平洋諸国の発展に大きな貢献をして輝いている「海洋大国」であることを、宇宙飛行士の視点で納得することができる。T P P交渉は、米国とともに世紀の基盤をつくる絶好の舞台なのである。

「胡蝶の夢」は、味わって損はない。手にいれるのは困難な貴重種だそうだから、蝶の皇帝といわれる一頭の「テングアゲハ」はムリでも、華麗に舞う姿を思うだけで気分は晴れる。貴重種である必要はない。胡蝶に同化してひらひらと舞った壮年の荘子の「胡蝶の夢」は、味わって損はない夢のひとつである。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上での温かなぬくもりはなまめかしい）でもいい。親ゆずりの高価すぎる骨董品なども、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間いっぱい委ねる「わたしのもの」だから、候補はいくらでもあ
る。なければレプリカを置いておいてホンモノを探し出すことにすればよい。

季節に応じて差し替えるのが「季節小物」。

わが家に四季折り折りの「モノ同士のモノ語り」がはじまる。季節小物たち全員集合！ といっても、アンタレスとシリウスは同時に夜空には出ない。風鈴と長火鉢とをいっしょに部屋に飾ってはいけない。家ネコだってビックリする。

こうして「高齢化コア（核）用品」とそれを巡るいくつもの季節小物、それに奥さまが持つ「わたしのもの」の応援をえて、パパとママのありようが見えてくる。

気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。

それでいい。モノによる「家庭内高齢化」の成立は、モノを通じた親子語りのはじまりを意味する。

外へ出てかっこよくボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感が希薄なようでは、ほんとうに優れた高齢活動家とはいえない。

「家庭内高齢化」は初めの始まり

*バランスいい「三世代ステージ」が目標

家庭内の「高齢化コア（核）用品」として、「MY・チェア」ほかを推奨したが、高齢期の自

己目標にむかう能力を支えてくれる愛用品、そして生活感性に折り合う日用品でありさえすれば何でもいい。

ここが重要なところだが、なければ間に合わせるのではなく制作を要請することだ。

日本の熟練技術者なら、みなさんが思いつく程度のものなら、何だっけつくれる。要請がないからつくれないのである。「引退余生」型の人生からの要請は乏しい。ここは「現役長生」型のみなさんの出番である。みなさんの優れた生活感性を納得させてこそ人生は豊かになる。一つひとつは水玉模様のように小さいが、それが何万、何百万、何千万と重なった情景は思うことができる。その達成者と享受者は、いまこの国で暮らしている「現役長生」型の高齢者のみならず、その実人生となる。

傍らに置いて生涯にわたって愛用する「コア（核）用品」となれば、数年でモデルチェンジするような消耗品では役不足。だから日新月异で変化するIT製品や車などは高価であっても有用であっても評価が成り立ちづらい。といって「千年杉」を細工した違い棚のような鮮やかな年代主張は、なくともいい。あればそれに越したことはないが。

どうだろうか、ここでの「高齢化コア（核）用品」というのは、六〇歳から始めて終生あるいはもう少し先の次世代の利用までを考慮した「超人生耐久優良品」（遺産として残るほど）といったものとして、およそ三〇〜四〇年利用というあたりをメドとしよう。

「高齢化」の意味合いはここでは「長年化」「優良化」でもあって、だから高齢者だけが利用す

るといふ狭い意味ではない。「長年愛用する優れた日用品」といったところ。

これまでの家の中は眺めてのとおり、オープン・スペースに置かれているのは家族共用の家具つまり「三世代ミックス」型の日用品ばかり。そのうちでも鉢植えや観葉植物や床の間の軸といった「季節の気配」を屋内に取り込む用品・用具類は、「家庭内高齢化」のきっかけにはほどよい素材である。高級家具はそろっていても、季節の気配が動かないリビング・ルームや客間や居間なら「室内高齢化ゼロ！」の評価を下しておこう。

高齢者の側からの「家庭内リストラ」が初めの始まりである。

家族構成にもよるが、「三世代同居」を保っているお宅だと、青少年、中年、高年という生活感性が異なる三世代がいつしよに暮らすわけだから、共有するものとともに、それぞれが優先し専用する「三世代のステージ」の形成が次の課題になる。

それぞれの立場での生活動線を考慮する「三世代のステージ」の形成は、同居する者お互いの生活の自由を奪うものでないことがお互いに理解されないと先に進めない。「共助あるいは共生の文化」こそが、持続可能な家族、社会、経済、国家への原点となる。

ここでは何よりも、わが家に親しい友人を迎え入れるような優れた「高齢化コア（核）用品」をつくってくれる熟年技術を持つみなさんに、まずみずからがそしてみんなも納得できる国産・地産の優良日用品を創り出してくれるよう熱いエールを送って先にいくとしよう。

三 暮らしの知恵を次世代に伝える

「エンブテイネスト家族」の孫育て

* 近居よりも同居が未来型

「多子化・高齢化社会」が本稿の譲れない立場である。だから政策不在による「少子化・高齢化」を時代の流れとして納得して「総人口減少」をいい、政策を移そうとする立場へ異議をもつ。現状の追認政策が、いまの高齢者、将来の高齢者の実人生にとって理にかなったものでなく、国民の「多子化・高齢化」への努力を閉ざすものになるからだ。

ここではそんな大ぶりの話ではなく、六〇歳代の「還暦期」よりやや高齢の七〇歳代の「古希期」にあるWさんのお宅をたずねて、そのささやかな試みの実例を見てみたい。課題は「わが家三代の暮らしの知恵を次世代に伝える」である。

三世代家族が三分の一ほどはいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。国の骨格をもろくしないという考え方に沿ってである。

このところの傾向として、ずっと「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%が同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台に。大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「TSUNAMI」がトップという時代に、場違

いといった感じでベストテン入り（二〇〇〇年度の一〇位）したことがあったが、「孫」との同居の減少傾向はなお続いており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

すでに哀楽をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」として想い見るほどのスペース（エンブレティネスト。空になった巣）を、そっとしておくことができているご家庭も多いことだろう。

Wさんの場合も、中年期にぎりぎりまで費用を工面して借り入れをして、都市郊外の戸建住宅を購入して転居した。

子どもはそれぞれに自立している。兄はしごとで関西暮らしに。娘の家族が近くに住んでいる。高齢者夫婦ふたりで暮らしているマイホームは、親子四人のための「二世代型住宅」と呼ぶことができる。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、とくに娘にとってはひそかな生活戦略、「二世帯住宅」にかかわるスペースでもある。

「古希期」あたりからの高齢者の「家族」のありようは、「わが家の三世代同居型」か「ひとり暮らし型」かに分かれる。後者の場合には、先に夫を失ったあと（逆もある）には晩年はひとり暮らしになる。

ここでは本稿が本来の「日本型標準家族」として想定している「三同同（三世代同居）型」家族のありようとして、Wさんのご家庭の姿を追ってみたい。

孫はかぎりなくかわいい。ところどころ傷みは目立つものの、住み慣れた「二世代住宅」に残って暮らしている父と母は、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、わが家の三代目を養育する「三世代型」の住まいを用意することになる。

「近居」の場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。幼い孫はかわいい。暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出会いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

きちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっている。現状ではこのあたりが高齢者にとっては標準的「しあわせ家族」となっている。

「近居」がうまく機能しているみなさんのご家族のしあわせを祈りつつ、このところ減りつづけてきた「三世代同居型」住宅の課題をみてみたい。こういう住宅が三割ほどは残っていないと、わが国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。

いままさにその瀬戸ぎわの時期にある。「わが家三代の暮らしの知恵」を子々孫々に伝えるには、まずは「三世代同居型」住宅が必要である。かつては白装束で嫁いだ花嫁さんの献身的な人生によって、同等ではない「三世代同居型」住宅が担ってきた「わが家三代の暮らしの知恵」を、いま新たな「三同同（三世代同居）型」住宅の登場によって、それぞれの世代みんなが平等に暮らせる住環境が得られるようになる。

いま必要な住環境は、かつてのヨメ（嫁）の忍従によって成り立っていた農家型標準住宅ではない。三世代がそれぞれのプライバシー空間を保持しながら、同等の意識で暮らしをとにもすることができるようやや大きめの家族住宅、「三同同（三世代同等同居）型」住宅である。

女系家族W家の三世代同居

*「実家依存症」といわれても

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月の「ハネムーン・ベビー」を待つこともない。結婚六カ月前後が最多とかで、だから案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー」がやってくる。

ふつういわれるところの二五歳までの「出産期」をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代に。このままでは二人目、三人目という少子化に歯止めをかける出生率の回復のしようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どもをと覚悟はきめたものの、夫婦ふたりの不安定なしごとでは養育・教育費が家計の重圧になるのは目の先に見えている。

大学を卒業するまでに公立でも約一〇〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるといいうし、

就学前の幼児教育期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、

「ケアさんを借して」

ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。国は夫婦ふたりによる子育てを「新エンゼル・プラン」以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にしてしごとをしている専門職側からは、祖父母（とくに姑）の育児参加はなお歓迎されていないのである。

驚いてはいけない。「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていない。これでは「わが家三代の暮らしの知恵」は、祖父母の立場から子・孫に伝えようがないのである。といってこれまでの根深い嫁たちの怨念をケアもせず無視して、祖父母の参加を呼びかける資格などどこにもない。ただし来年からは子育てに地域力の参加が要請されることになる。高齢者として、地域の孫世代の養育にあたることは期待されている。その中にはかわいいわが家の孫の姿もある。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦がいる。かつてシュウトメにわずらわされないう実家を離れて「専業主婦」を求めた母世代の「核家族」指向と「寿退社」と「M字型」就業。いまやっとそこか

らのUターンが始まる。「三世代同居」による家族支援で、「M字型でない一文字型」に就業をつづけて課長になり部長になれる娘世代の人生設計。そして出生率の回復も。

ここは女系の母娘に優位性をみるが、なんとか実現にこぎつけてほしい計画である。

一九九五年に「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（建設省。「高齢社会対策基本法」が成立した年）が出て二〇年近くになる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべもあって、高齢化対応がもつとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの「世帯同居型」住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、共用スペースのつくりつけがミドル（+ジュニア）主体に寄りがちになっている。

「三世代型住宅」とは称しているものの、高齢世帯の「離れた和室ひと部屋への引きこもり」が推測できるものが多くみられるのが実情なのである。

「三同同（三世代同居）型」住宅に期待

*暮らしの知恵を次世代に伝える

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあって、建て替え

をして「三世代同居型」の住居を建築することになっている。

メーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはない。各メーカーとも高齢者ユーザーからのさまざまな要望に対応できるノウハウを揃えており、とくに住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されている。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・などが実現されている。「三世代同居住宅」で「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもある。すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。

そこで、Wさん夫妻は参加してみた。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定しており、すでに年月を重ねてきた街並みに落ち着きを与えていることがわかる。樹木も育って、かなり大ぶりのサクラが庭の隅にあつて、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

Wさんの庭への視線を察して、ご主人がいう。

ご夫妻のほかは高校生のひとり娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあつて、「マスオさん」として「三世代同

居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。Wさんは、わが家の娘むこマスオさんの意向も十分に反映せねばならない。

上下階の雰囲気に違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからとWさんの奥さんは指摘する。「三世代同居型住宅」として広さも構造も申し分ない。それでも義母の方の一階での孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったと、これはご夫妻がいうところ。

これではほんとうの高齢化時代の「三世代住宅」とはいえない。「人生の第三期」の主演として、これから二〇年もの長い高齢期をゆったりと暮らす家ではない、とWさん夫妻は気づいている。ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母である奥さんの出番である。孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての共有スペースを要請している。「三世代のプライベート・スペース」と生活動線を織り込んだ住居を目標にして、メーカーの技術者と設計にはいつている。

三世代が等しく扱われる同居住宅が「三同同（三世代同等同居型）」住宅。

「家族みんなで考えていろいろ解決することができずからね」

と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三代が出くわすさまざまな場面での公平な処理に期待をこめていう。

「三同同住宅」をいま実現できるW家は「超しあわせ家族」である。

すべてのご家庭でできるわけではない恵まれたケースではあるが、多くあっていいケース。国も企業も超優遇措置を講じて、「しあわせ家族」を増やすこと。穏和な国民性は三世代あるいは四世代同居に培われて継承されていくにちがいないからである。

「三同同居」の標準化のために、国や自治体はさまざまな優遇措置をおこない、建設業者はノウハウを蓄積し、地域の企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置をするとともに、子育て期の女性が男子社員と伍して能力を十分に発揮できるよう支援する。地域と家族は総出で次世代を育てることとなる。こんな町なら人口も増えて、みんなが生き生きと暮らせるだろう。

これまでの女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトという「M字型」就業。これにかわって、入社時から高年齢まで真一文字にしごとに集中できる女性人材として処遇されるようになる。そして何より次世代に、「わが家の暮らしの知恵」を母系のつながりを有効に活かしながら伝えることが可能になる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがある。

「うちのジージがね」

とって孫が自慢する。

同居しながら高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するために重要な「三つのステージ化」の一環なのである。